

# 授業「自分の探求」をめぐって

梅 原 大 輔

## 序

平成 13 年度に本学で始まる新カリキュラムでは、一年生を対象にした全学共通の必修科目として「自分の探求」と「科学の方法」という二つの科目が新しく開講されることになった。三年生を対象にして開講される「現実を知る」を含めたこれらの授業は、二学部制への移行に伴った本学のカリキュラム改革の中で重要な柱となるべきものである。しかし同時に、これらの授業は従来なかった種類のものであり、実際にどのように進めていけばいいのか、ということについては未知の部分が多くある。このため、平成 11 年度から実際に「自分の探求」という授業を自由科目として開講し、梅原大輔・原田隆司の 2 名が担当して、新カリキュラムの一部を試験的に始めることになった。

本稿では最初に、「自分の探求」がカリキュラムに登場した経緯および授業の狙いを確認し、この授業の開設に向けてなされた議論の経過を振りかえる。更に、今年度の授業の内容を報告し、平成 13 年度からの本格的な導入に向けて、現実にはどのような方法でどのような授業を展開していくことができるのか、全学的な議論を深める足がかりとしたい。

なお本稿は梅原による単独執筆である。内容に関する責任は梅原に属するものである。

## 1 「自分の探求」の背景

### 1.1. 大学の入学期指導をめぐる動き

「自分の探求」に至る議論を溯った時に行き当たるのは、大学の入門期指導をどのように行うべきか、という問題である。

平成3年の大学設置基準大綱化によって、従来の一般教育科目と専門教育科目の区分が廃止され、大学のカリキュラムは大幅に自由化された。これに伴い、一般教育科目にあった人文・社会・自然という3分野の区分や最低履修単位数に関する縛りもなくなり、各大学の裁量に任されることになった。本学でも、これを受ける形で平成7年度に全学的なカリキュラム改訂を行い、単位数の見直しや科目名称の変更を中心に共通科目のカリキュラムも改訂された。

一般教育科目に対する規制が無くなったことで生じた流れの一つは、専門教育を重視するという傾向であった。例えば一般教育科目の必修単位数を大幅に削減したり、分野の枠を取り払って科目選択の自由度を大幅に高めるといった動きが出てきた<sup>1)</sup>。各地の国公立大学で見られた教養部の解体は最も典型的な帰結であった。しかしその一方で、新入生に対して行う入学期指導を見直し、一般教育科目に新しい視点を加えようとする動きも、各地の大学で見られるようになった。

このような新しい試みの中では、大学での教養教育の意味について、大きく三つの考え方があるように思われる。一つは、バランスのとれた知性のために、自分の専門とは別の学問分野に対する教養が必要だというものである。これは従来の一般教育の考え方に近いものと思われる。大綱化によって一般教育よりも専門教育という志向が強くなったのに対する揺り戻しともとれる

---

1) 一例として、実践女子大学では、語学や体育をも含む「総合教育科目群」の中から自由に48単位とればよいことになっている。黒木比呂史『検証大学改革』。1994年。論創社。

が、平成5年のオウム真理教の事件に有力大学の学生や卒業生が多く関わっていたことが、大学関係者に大きな衝撃となったこともあっただろう<sup>2)</sup>。理科系の学生にとっても文科系の教養が必要ではないか、という議論となる場合が多いが、文科系の学生にとっての理科系科目の重要性が語られることもある。

二つめの考え方は、現代の社会に見合った教養は、従来の人文・自然・社会という区分では取り扱うことができず、学際的にとらえるべきだ、というものである。例えば、立教大学の寺崎教授は、『『新しい知の領域』である環境、人権、生命、宇宙を核とした専門性に立つ新教養教育が必要』であると述べている<sup>3)</sup>。

教養に対する第三の考え方は、上の二つよりもずっと実用主義的なものである。特に、現代の「読み書きそろばん」である英語会話とコンピュータを全ての学生に必要な基礎的教養とし、実的な運用能力を高めようとする考え方は広く行き渡っているように見える。カリキュラム改革の際に、英語の必修単位を増やしたり、新入生全員にノートパソコンを購入させるといった例が数多く報告されている。英語とコンピュータ以外にも、大学で学生として学んでいく上での基礎的技術を入学期に身につけさせようとする試みもいくつかの大学でなされている。これについて最も注目を集めたのは、平成6年より始まった東京大学の「基礎演習」<sup>4)</sup>であろう。この授業は、そのテキストでありベストセラーとなった『知の技法』によっても広く知られている。これ以外にも、高知大学の「大学学」<sup>5)</sup>や広島大学の「学び方ゼミ」<sup>6)</sup>といったものが平成9年度より一年生の必修科目として開講されており、新聞

2) 「オウム事件に見る大学教養教育の貧困」『朝日新聞』1995年5月8日など。

3) 『朝日新聞』1997年11月8日朝刊。

4) 教養学部文科系一年生1,600人の必修科目。

5) 同大学の歴史、資料の探し方、卒論の書き方などを8回で講義するもの。『朝日新聞』1996年9月18日夕刊。

6) 全学部の約2,900人の新入生が受講。一クラス10人前後で、資料の探し方、読み方、レポートの作成方法、討論の仕方などを学ぶ。『朝日新聞』1996年9月26日夕刊。

で紹介されている。また、何らかの形で日本語の文章力や口頭でのプレゼンテーション能力を高めることを狙いにした授業となると、更に多くの大学で開講されている実例がある<sup>7)</sup>。いずれの場合も従来は、「学生が自分で身につけるべき能力」として正面から授業で扱うことなど考えられなかったものであるが、大学の大衆化に伴う学生層の変化により、それぞれの大学が実状に合わせて対応せざるを得なくなったことを伺わせる。また、大教室での講義になりがちであったために学生の関心を失わせることが多かった一般教育の授業に対する反省から、こういった技術的科目が、新入生ゼミの形で少人数で行われている場合も多いようである。新入生に大学教員と近い距離で関わることのできる授業を提供することで、大学への適応を促そうという狙いが見て取れる。

一般教育科目に対する必修枠を完全に取り払い、数多くの科目の中から完全に自由に選択させるという方が、学生にとっては好評であることは間違いないだろう。しかし一方で、一般教育にどのような必修科目を置くかということは、その大学が、全ての学生に最低どのような教養や技術を求めるのか、という大学の理念にも関わる大きな問題である。甲南女子大学でも、新学部設置準備委員会で新しいカリキュラムを作るにあたって、従来の枠組みは前提にせず、全く白紙の状態から共通科目というものを考え直してみようと考えた。本学の学生にとって、どのような教養が必要か、何が欠けているのか、学生と教員の間の認識の違いを埋め、新入生に大学にスムーズに適応してもらうにはどのようにすればいいのか、ということを検討した。

## 1.2. 新カリキュラムの中の共通科目の位置づけ

共通科目のカリキュラムを見なおすに当たっては、共通科目を軽視せず、共通科目に新しい役割を与えることから出発した。本学の性格は、大学院を

---

7) 多摩大学の「国語」、富山大学の「言語表現科目」、高知大学の「日本語技法」など。

中心に研究者を養成するというよりは、高い教養を持った卒業生を社会に送り出すことにあり、その意味では学部を中心とした大学である。このため高度に細分化された専門の学問領域に学生を閉じ込めがちな各学科のカリキュラムとの間にバランスを取るために、共通科目を充実させて幅の広い教養を与えることが必要だと考えた。他学部、他学科への聴講を現在以上に促すためにも、各学科で開講できる科目は原則として共通科目では開講せず、8学科では開講できない領域の科目や、学部学科の枠にとらわれない学際的な性格の科目を共通科目に置くことにした。

また共通科目を専門科目と並行して4年間にわたって履修できるようにするものと考え、特に3年生を対象にした必修科目という考え方を導入することにした。これは卒業準備科目という位置づけで、「現実を知る」という授業になった。これに対して、一年生での科目は必然的に、高校までの生活から大学での生活への導入を促す科目として位置づけられることになった。これが「自分の探求」と「科学の方法」につながった。

一方で、文献検索、日本語表現、プレゼンテーションなど学習技術に関わる科目は、各学科で少人数のものを設定する方が望ましいと考え、共通科目として置くことはしなかった。実際、多くの学科では一年生用の基礎演習科目が開講される予定である。

### 1.3. 「自分の探求」の目的

そもそも「自分の探求」のような授業を設定しようとした出発点には、新入生の知的好奇心を広げるきっかけを作りたいという意図があった。平均的な新入生にとって、大学で提供されている多くの専門的な学問は、日常生活からあまりにもかけ離れていて接点を見出せないのではないかという懸念がある。これには大学の大衆化によって、大学生であればこういう本を読んていなければ恥ずかしい、というような共通の価値観がなくなったこと、社会の情報化・マニュアル化が進み、自分が必要とする知識をお手軽に効率よく手にするという考えが浸透していること、などが影響しているだろう。ま

た高校までの授業を通して、勉強というものを与えられた知識を受け入れるものと捉える傾向も強い。このような学生にとって、高度に専門化、細分化された授業を受けても、直接に生活に必要でなければ、それが自分に何らかの役に立つと感ずることができないのは当然のことだろう。

このようなことから、特に新入生が大学で最初に接する授業は、まず学生自身が自分で考えることができるように、過去と現在の自分の周辺を対象としたものであるべきだ、と考えた。それは例えば、学校・家族・女性・若者・日本などをキーワードにするもので、教育学・社会学・哲学・心理学・文学・言語学・文化研究など幅広い領域から参加できるものになるのではないかと考えた。これらの領域を通じて、現在共通科目で開講されている人文科学・社会科学の多くの部分を覆うことができるので、それによって共通科目部分から従来の人文系・社会系の科目を取り除いてもいいのではないかという方向で議論は進められた。

後の議論では、この授業を一人の担当者によるものではなく、リレー講義の形にしてはどうか、ということになった。現在、自由科目の「女性学」で実際に行われている形式を良き前例として想定した。また学生の「自分」をめぐる領域をできるだけ幅広く眺めてもらいたいという欲張りな理由からでもある。こういった議論を通じて、この授業は専任教員が責任をもって担当すべきだ、という方向になった。これは3年生を対象とした「現実を知る」が、原則として大学の外の社会の人たちを非常勤として招いて担当してもらう、という方向と対称をなしている。

この授業についての最初の教授会報告は平成10年7月22日のものである。この時、この授業には「人間学基礎」という重々しい名前が仮称としてついていた。授業の内容はある程度明らかになってきたが、それをうまく言い表す授業名称が見つからなかったのである。この報告で述べられているこの授業の目的は次のようなものである。

- (1) 主として過去と現在の自分を見つめ、アイデンティティを意識させる

ための科目で、下位学年に対して提供される。

- (2) 大学で学ぶということを理解させ、学習意欲を刺激すること。

その後、夏休みの議論を経た 8 月 26 日の委員会資料では、「自分の探求」という名称と共に、次のような目標が与えられている。

自分でものを考えること、他者の生き方・考え方を理解する姿勢が少しでも身につくようになる。学問以前に、自分について、人間について考えるようになる。

11 月になって、「自分の探求」を平成 11 年度から試験的に開講してみてはどうか、ということになり、教務委員会に趣意書が提出された。この書類には、かなり具体的な授業の姿が示されているのだが、教授会でのカリキュラム変更の議事の際にはこの資料は添付されなかった。ここには次のようなことが書かれていた。

平均的な高校卒業生の視点から出発し、学生が自分の視野を広げ、自分を客観的にとらえるきっかけを作れるようにします。2 週間ずつ 5 人程度のリレー形式あるいはシンポジウム形式の講義と学生のフィードバックをもとに、授業をまとめていきたいと考えています。さまざまな材料を通して、現在の学生が平均的に持っている世代的文化的価値観を揺さぶり、学生がものごとを判断するときに使っている「価値のものさし」を意識させます。また、そのものさしを大きくしたり、立場をかえて別のものさしでものを見る、という体験ができるようにします。結果として、学科を問わず大学での専門的な勉強につなぐための意識の下地を作ることが狙いです。

この授業の内容が最後に教授会に報告されたのは、平成 11 年 5 月 12 日である。この時点は実際に 11 年度の「自分の探求」を何度かやってみた後で

ある。ここでは、授業の見通しも含めて、もう少しつっこんだ目標が示されている。

複数の専任教員がひとつの授業を担当し、専門分野での研究・教育を通して、あるいは人生の経験を通して、得たことや感じたことを投げかけたと思います。時代、世代、性、地域などの異なる生活・人生を提示することです。方法としては、自らを語るというスタイルでもいいし、また映画、音楽、文学、ドラマ、マンガ、新聞、雑誌などの材料を提示してもいいと思います。

新入生が、そのような話題に共感したり、想像したり、自分と比較してみるなど、自分なりに受けとめることで、高校までの勉強や経験の殻をうちやぶる機会になればと思います。そして

- (1) 新しいものの見方がたくさんあるのだという予感
- (2) 自分が生活し生きていくことと大学での勉強の接点を探そうというきっかけを与えることができればと思います。

最後の資料は新学部設置に関わる文部省への申請書類から抜き出したものである。特に下線部には実際の授業を行ってみて得られた感触が示されている。

従来の区分でいう「人文」「社会」「自然」分野の専任教員が共同で担当するリレー形式の授業である。1年次の入学直後の学生に、専門分野の研究・教育を通して得た知見やそれに至る過程、あるいは人生経験を通して身につけたこと感じたことなどを提供する。各教員は、自分の専門を中心にしつつも、できるだけ幅広い話題を提供し、受講生が、そのような話題に共感したり、そこから何かを想像したり、他者の生き方を自分と比較してみるなど、自分なりに受け取れるように工夫をする。理解を助けるために、新聞・雑誌記事や各種メディアなども適宜用いる。

各クラスは、具体的なテーマに基づいて構成される。そのテーマや個別の話題や資料から、学生が、時代・世代・性・地域などの異なる生活・人生に触れ、知的な探求や日常生活の背後にある歴史や社会のメカニズムに気づくきっかけを与える。最終的には、自分を探すということは、自分でしかできないこと、時間がかかるということに気づかせる。また、専門分野の異なる専任教員が担当することにより、本学の専門教育や全学共通科目への動機づけを与える機会ともなる。

6名の教員がひとつのクラスを構成するオムニバス形式の授業であるが、個別のテーマと各教員の担当部分については、開講直前に、社会の新しい動きや話題、学生の関心なども考慮しつつ協議し、設定する。

## 2 「自分の探求」を開講して

授業計画には次のようなシラバスを掲載した。意識的に「ですます」調を用い、学生に呼びかけるような文章にした。

これは特定の学問分野について学ぶための授業ではなく、あなた自身を知るための講座です。

20年近くも生きてくる中で、誰でもさまざまな人やものの考え方に影響を受け、自分の価値観を形成しています。その中には自分でも気が付かないうちに影響を受けているものもあるはずです。自分の中にある価値観を時代や文化に照らしあわせることで「自分探し」をしてみませんか。自分を客観的にとらえることを通じて、異なる価値観を受け止め、自分の視野を広げるきっかけになるはずです。

あらゆる学科からの学生を歓迎します。

当初、この授業の定員は平成13年度からの予定に合わせて100人程度、最大で150人までと考えていた。どのくらいの学生が第1回の授業にやって

来るのかは全く予測できなかったが、蓋を開けてみると250人もの学生がマルチメディア教室に溢れることとなった。月曜の5限という時間帯であったこと、例年多くの学生を集める「女性学」と同じ時間帯であったこと、専攻科目との関係でフランス語学科からの履修ができなかったこと、を考えると、これは驚くべき数字であると言える。結局、1回目の授業は大抽選会と授業開きのアンケートだけで終わってしまった。

この時のアンケートに、「なぜこの授業に来ましたか」という質問を入れておいた。これに対する学生の回答例をいくつかあげてみる。

- ・「自分の探求」という授業名とその内容をよんだとき、すごく衝撃的だった。今、2年だけれども最近、勉強や就職のことで悩むことが多くなってきたので、まずこの授業をうけていろんな話をきいて、もう一度自分自身をみつめなおしてみたいと思ったから。
- ・学生要覧を見て「自分の探求」という科目名を見て、ピッピッときました。そして授業内容を見て、ぜひ受講したいと思いました。私は今年4回生なのですが、今までではじめてというか、ぜひ受けたいという授業に巡り会えました。とても楽しみです。
- ・自分の日常生活の中では知ることのできない世界を見ることができるかと思い来ました。
- ・今の私にとって、最も学ぶべき必要のある内容だと思ったので。
- ・他の授業と違って自分というものをしっかり考えられそうだから。
- ・他の授業とは違って、ユニークで楽しそうだったから。授業名からして怪しかったけど、どんな授業なのか見てみたかったから。
- ・今までの授業とは全く違うおもしろさを感じたから。2人の先生+ゲストと、一つの授業でたくさんの人から「学問」とは違うことをたくさん吸収できそうだったから。
- ・学問ではなく、自分について考えたりする所が他の科目にはない魅力だと思って来ました。

- ・「授業」というよりも「思いがけずためになる話が聞けた」という時間が過ごせそうな気がしたので来ました。「ゲストをまねく」という点にも興味がかきたてられました。
- ・「勉強する」とか「学ぶ」という感じではなく、自分ですすんで「知る」ことができそうだから。
- ・今年から新しく始まる授業ということで、どのような授業なのか興味があつた。少しでも知らなかった自分を知れるのなら楽しそうだと思った。それにあらゆる学科からの学生を歓迎すると書かれていたので。
- ・なんかおもしろそうなことをすると思ったから。テストがないから。

こういった回答を読んで、受講生の熱気を感じながらも、こういう期待に応えられるのか、カウンセラーのような役割を期待されても困る、と悩ましい授業開きであった。

授業の内容について担当の二人で話し合う中で、今回の授業のキーワードを「若者」におくことにした。まず「今の時代の若者」というテーマを通してマスメディアで流布している若者像と当事者としての自分を比較し、「30年前の（つまり親の世代の）若者」というように時間の軸をずらして今の自分と比較し、更に「別の国の若者」というように空間を移動して今の自分と比較する、というように、時間や空間を変えた視点を通して、自分および自分の世代を客観的に見つめることを計画した。実際に行われた授業は、このテーマの周辺を右往左往しながら、時にはかなり型破りな授業も行った。授業を進めていく中では具体的に次のような題材を用いた。(1) 若者について歌った音楽。古いもの、新しいもの。(2) 現代の高校生の生活を描いた映画、(3) 30年前の大学生の生活。ビデオや話を通して。(4) ボランティアに参加する若者。ビデオを利用して、といったものである。

また岡田明、朴一功、森田勝昭、山上暁、島式子の各教授にゲストとして参加していただき、ある場合にはこちらの設定したテーマについて、ある場合には自由に設定してもらったテーマで話などをしていただいた。

レポートの課題は「かつて若者だった人たちの話をきいてきなさい」というものにした。丁度話題になっていた『二十歳のころ』<sup>8)</sup> というインタビュー集を少し意識してみた。

最後に、セメスターの終盤で受講生が書いたこの授業に対する感想をいくつか拾っておきたい。

- ・……実際授業に出てみるとおどろきの連続だった。生まれてはじめてこんなにたのしい授業があるのかと思えたほどだ。授業はただだまって先生がしゃべることをきくものだとあたりまえのように思っていた。しかしここではゲストの先生方がいらっしゃったり、音楽をきいたり、映画を見てみたりと、いつも気持ちがリフレッシュされた気がした。
- ・自分の探求というおもしろい言葉の響きに誘われてこの授業をとったわけですが、「授業らしくない授業」といったところが気に入って、欠席も一回しかしませんでした。結局今でも「自分とは何か」はよくわかって、というか全然わかっていないんですが、考えるきっかけができただけでももうけものだと思って喜んでます。本当にこの授業は楽しかったと思ってます。
- ・私は月曜日の時間割は大嫌いですが、この授業のためにがんばったといってもいいです。抽選に通った時にやったーと思って、2回目に、取って大正解と思いました。人間が生きていく上で必要なものと考えたと思います。人の話をきくのはとても好きだし、さまざまな先生方の話が聞けてよかったです。
- ・最初のころはこの授業がとても楽しみであった。3曲の歌を聴いたときすごく感動したし、映画を見たときもすごく考えさせられた。それに他の人の考えなども知れて、とても楽しかった。だけど途中から私がこの授業になれてしまったのかも知れないが、あまりおもしろくなくなって

---

8) 立花隆+東京大学教養学部立花隆ゼミ。1998年。新潮社。

きた。何がどう変わったから、というのは分からないが、なぜかあまり面白くなくなってきた。でもまたこの授業があるなら、絶対受けたいと思う。こうやって、いろんな人の考えや自分の新しい考えなどを見つけられるのは、とてもいい機会だった。

- 自分の探求って何をするんやろうと思ってたけど、期待通りというか期待通りでないとかよくわからないけど、確信を持って言えるのはこの授業が好きだったということ。日によって感じ方が違うけれど、この前のコンサートはかなりよかった。その人の好きなこと、大切にしていることに触れることができて、すごくうらやましかった。この授業を受けるようになって、前よりも自分についていろいろ考えるようになったし、自分の適性とか自分の好きなことを探そうと努力するようになった。その点においてかなり影響力があったと思います。
- 私が一番印象に残っているのは学生運動の話でした。なぜかという、昔の大学生が今、大学生である私たちとどのように違ったのか、知りたかったからです。違うだろうと思っていたけど、昔と今とではほとんど考えていることは変わっていなかったのに驚きました。若いころはみんな一緒のことを思うんだなあ、と思いました。他の授業では得られない何かを得たような感じです。
- この授業は時間ごとにいろいろなことをしました。そしてそれぞれの時間に学びとることがありました。いや正しく言えば、あったのでしょうか。私は、自分の探求で何を得たかと問われても答えることができません。でも決してこの授業を受けても受けなくても同じというわけではないんです。自分でもよく分からない部分で何かを感じとったということは何となくわかるような気がするんです。でも何かはあくまで何かなんです。いろいろな意味でこの授業は不思議なものだったように思います。
- 私は「自分の探求」という授業に対してとても興味があり期待もしていたが、今まで受けてみて、正直言ってがっかりした。退屈だと思った。いろんな形の人生や、いろんな人の考え方が見れると思っていたのに、

当たり前のことやきれいな事しか聞けなかったし、自分にプラスになる意見はほとんど聞けなかった。「型にはまらない授業」という名目だけど、内容は「型にはまったつまらないもの」だった。もっといろんな人のいろんなことに対する意見を聞きたかった。毎回テーマを作って、それに対する資料を先生方が私たちに提供し、最後にそのことについての意見などを提出し、次の授業で匿名公開する形がよいと思う。

### 3 問題点と展望

一セメスターの授業を終えてみて感じたことを列挙してみたい。これはあくまでも梅原の個人的な感想である。

#### 3.1. 「自分の探求」という名称について

「自分の探求」という授業の名前に学生が強く反応して第1回の授業に詰めかけてくれたことは間違いない。しかし学生の中には、この授業で心理テストなどをして自分の姿を知ることができるのではないか、という期待を持っていたものもかなりあり、「心理学に興味があったから」この授業に来た、という回答が初回のアンケートにも見られた。梅原としては、心理テストを一つのトピックにして心理学の先生あるいはカウンセラーの先生に話をしてもらってもいいかと思っていたが、「若者」というキーワードにうまく繋がらなかったこともあり、今回はそれが実現しなかった。学生が一般に心理学に対して持っているイメージ（心理学を勉強すれば自分や他人の心がわかる、というようなもの）がこの授業の科目名称から強く感じられたのかも知れない。いずれにせよ、この名称が学生、教員の両方にとって誤解を生む可能性のあるものであることは否めない。この授業の目的を学生と教員の双方が理解しないと、学生の不満を招くことにもなるだろう。

#### 3.2. 何か面白いものがあるのではないかとこの予感

この授業に何か普通の授業と違う臭いをかぎつけてやってきた学生もかなりいる。リレー講義、複数の担当者のような授業のスタイルそのものに面白味を感じている。このような反応は、われわれが新カリキュラムで新しい共通科目を提供していくにあたって、大きな力添えになる。何か面白そうな予感があれば、5限の授業にでもやってくる学生がたくさんいるのだ、という事実は大きな希望である。

### 3.3. 一年生の必修科目とすることについて

今回の授業はどの学年の学生も受講できる自由科目として開講された。このためクラスの四割は一年生以外の上位学年の学生であり、4年生も何人か来ていた。しかし、本来この授業は、新入生を対象にして、新入生を大学の授業になじませる目的をもっているはずだ。今回と同じ内容の授業を一年生だけを対象に、しかも必修科目として行ってしまうまいかどうか、大いに心配である。一体何を目的に何をやっているのか、ということを明確にしなければ、こちらの意図が容易に伝わることはないだろう。

また編入生のように途中入学してきた学生に、この授業を課すのか、ということも検討しておきたい。

### 3.4. 若者をテーマとしたことについて

若者としての自分を見直す、というテーマは取り組みやすそうに見えたが、反面、学生と教員の差が直接的に現れすぎるテーマであることが分かった。下手をすると、教員の話を単なる昔話で時代が違うもの、としか受けとめないことになる。それをさらに説明すればするほど、説教じみたものになってしまう懸念がつきまとう。まさに授業の中で世代間の断絶を感じるようになる。

### 3.5. 達成度の評価

この授業の達成度をどのように評価するか、というのは大きな問題である。

そもそも達成度を評価できるような授業なのかもわからない。「案に単位が取れそうだから受講した」と正直に書いた学生ももちろんいた。卒業単位をかき集めなければならない4年生が、初回の授業の抽選会を経ずに勝手に登録していた例もあった。必修の科目とする以上、クラスによって評価の方針が大きくかわることは避けなければならない。またリレー形式の授業でどのような評価方法をとればいいのか、という課題もある。グレードをつけずに可否で成績を出すことも含めて、今後検討する必要がある。

### 3.6. 方法論

レクチャーで終わることなく、学生に能動的に授業に参加させることは難しい。特にリレー講義という形式をとると、一人の担当者が学生をじっくり知るチャンスを作ることが難しく、一方的な講演会のような授業になってしまう可能性がある。学生は、大きな教室での講義に大学らしさを感じる一方で、対話のある双方向的な授業を強く望んでいる。授業の形態について、最もこの授業の目的にかなうものを模索していく必要がある。

また教員にとって専門の領域に踏み込まずに授業を行う、ということも大変に難しいことである。まるで理論武装を解除されて学生の前に立たされるようなものだからである。大学の教員は皆、それぞれの専門領域を持っており、その分野において責任のある発言ができる。そしてまた、そのような専門性に裏打ちされた教員が担当するというのが、大学の授業を高校までの授業と区別する特性であるはずだ。各教員の持つ専門性を「専門の学問以前」をスローガンとするこの授業の中でどのように活かしていくのか、という点について更に考える必要があるように思う。

終わってみて、今回の授業はまさに暗中模索、試行錯誤、自転車操業という言葉がぴったりのものであった。そのような中でかなり無理をきいてもらう形で協力していただいた先生方には不手際をお詫びすると共に深く感謝します。